

(体育科)

**自ら学び、仲間とともに楽しく学習する子どもをはぐくむ  
～達成感と成就感を通して確かな学力を身につける体育科学習～**

大阪市立巽小学校 岡本和也 榊原孝司 多和田洋平 桑山直大

1. 研究主題について

本校では、学校教育目標「豊かな心をもち、自ら考え、たくましく生きぬく子どもを育てる」を設定し、取り組んできた。

本校児童は、明るく、人懐っこく、たいへん活発であるが、さまざまな課題をもっている。1つ目は、運動に関する二極化である。学校アンケートでは、運動に関心をもち、親しむ児童とそうでない児童に分かれた。2つ目は、体力の低下、持久力の弱さである。毎年行う体力テストでも、特に20mシャトルランの結果が低いことが明らかになった。3つ目は、規範意識の低さである。ルールを守らず、勝手な行動をする児童が少なくないという実態が見られた。

そこで、多くの児童になによりも、まず、みんなで運動する楽しさを味わわせることが大切であると考え、平成26年度の研究を「自ら学び、共に高め合う力を育む体育科の学習指導法」と設定した。平成27年度はその2年目とし、平成28年度はさらに発展し、研究主題を「自ら学び、仲間とともに楽しく学習する子どもをはぐくむ」とし、サブテーマを「達成感と成就感を通して確かな学力を身につける体育科学習」として、研究に取り組むことにした。

2. 研究について

(1) 児童に身につけさせたい「確かな学力」

- 技能面                      多様な動きや技がよりよくできること
- 態度面                      運動への取り組み方や学び方、友達とのかかわり方が身につくこと
- 思考・判断                  運動のポイントや技のコツがわかること  
                                    作戦や練習方法を工夫し、身につけた知識や技を活用すること
- 仲間とのかかわり          授業の中で、互いに意見を交流すること  
                                    声に出して応援したり、励ましあったりすること

(2) 研究の実践

- 授業研究
- 体力テストの結果と傾向の課題を全学年で考察
- 運動を進めるための環境づくり  
    的当てボード 毎週放課後サッカーボールに親しむことのできる日を設けること 等
- 学習カード等 資料の共有

(3) 授業研究の視点

- ① 運動量を確保するために、運動の特性・楽しさにふれさせる指導法の工夫
- ② 課題をもち、主体的に学習させるために、学習カードや映像資料の活用
- ③ 仲間との豊かなかかわりのために、教えあい、励ましあう場の工夫
- ④ 次につながる評価

(4) その他の研究・校内研修

- ① 体育科の実技研修 (全員参加)  
    運動領域ごとに適した指導や楽しいゲームなどの実技研修・実際の模範授業参観
- ② 基本技術研修を通して、授業力を伸ばす  
    第2(金) 体育科および希望アンケートを生かした講座と実技研修  
    第4(金) 若手教員を対象とした研修

(5) 各学年の授業研究

第1学年「なげっこダッシュゲーム」

第2学年「ドーナツ・キックターゲット」

第3学年「プレルシュートゲーム」

第4学年「陣地取りゲーム」(フラッグフットボールを簡易化し、安全面から改変したゲーム)

第5学年「フラッグハードルリレー」

第6学年「タグラグビー」

3. 研究の成果と課題

(1) 研究の成果

① 運動量を確保するために運動の特性・楽しさにふれさせる指導法の工夫

毎時間の初めに準備運動で主運動につながる基礎感覚づくりを取り入れた。音楽を使って体を動かすことにより、楽しく活動することができた。基礎感覚づくりの中で体を十分ほぐして気持ちを高めることができ、その後の主運動につなげることができた。

② 課題をもち、主体的に学習させるために、学習カードや映像資料の活用

単元のはじめに、イメージビデオや学習資料などを活用した。規則を理解するだけでなく、児童が取り組む運動への視点やめあての確認などに役立てることができた。また、学習カードを活用し、チームで作戦を考えたり、課題を共有したり、課題解決のため、主体的に活動するために効果的であった。

③ 仲間との豊かなかかわりのために、教えあい励まし合う場の工夫

チームのめあてや作戦等を話し合う場を設定することにより、児童はチームとしての仲間意識をもち、意欲的に活動することができた。また、指導者が積極的に声をかけたり、良いプレーを称賛したりすることにより、児童の教え励まし合う声かけが増え、仲間とのかかわりを深めることができた。

④ 次につながる評価

指導者はそれぞれの運動の評価基準を設定し、児童の学習の中で、発言、表情、動きや技のできばえ等を観察しながら評価を行い、学習に到達度をつかむよう心がけた。また、課題解決の場やまとめの場において、友達との相互評価をする場面を取り入れ、友達の励ましや助言によって次時の学習への意欲を高めることができた。

(2) 今後の課題

今回の取り組みでは、ICT機器の活用を十分に取り入れることができなかった。今後は、自らの動きをふり返ったり、良い動きを広めたりするICT機器の効果的な活用を図っていく必要がある。

準備運動で主運動につながる基礎感覚づくりを取り入れたが、本校の児童の課題である体力の低下についての取り組みを十分に行うことができなかった。3学期には、体力強化週間として全校かけ足を行ったが、年間を通して、準備運動の中で持久力を高める運動を取り入れるなど、今後さらに考えていく必要がある。